

作況ニュース（第6号）

水 稲
大 豆

（発行：令和8年7月17日）（編集：令和8年7月16日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

生育は早い！早めの診断と適切な穂肥を

－気象変化に対応した水管理の徹底－

－斑点米カメムシ類防除の徹底－

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方1か月予報（7月19日～8月18日）【令和8年7月16日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並の確率40%です。日照時間は、平年並の確率40%です。

週別の気温は、1週目（7月18日～7月24日）は高い確率80%です。2週目（7月25日～7月31日）は高い確率70%です。3～4週目（8月1日～8月14日）は高い確率50%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 7月21日（火）14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

（1）気象経過

【秋田地方气象台】

7月上旬：この期間、高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、はじめは低気圧や気圧の谷の影響により、雨や雷雨の所があった。

旬平均気温は高く、ほとんどの地点でかなり高い。旬降水量は少なく、ほとんどの地点でかなり少ない。旬間日照時間は多く、ほとんどの地点でかなり多い。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級区分
7月上旬	25.2	+3.1	かなり高い	0.0	0	かなり少ない	94.1	201	かなり多い

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほ（7月15日）の生育概況

8 地域振興局による定点調査（7月15日）が実施された。

「あきたこまち」（64地点）は、草丈64.7cm（平年比 98%）、㎡当たり茎数554本（同110%）、葉数11.9葉（平年差+0.6葉）、葉緑素計値41.6（平年比98%）であった。

「ひとめぼれ」（8地点）は、草丈63.6cm（平年比96%）、㎡当たり茎数552本（同101%）、葉数11.5葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値38.5（平年比102%）であった。

表－1 定点調査結果（各地域振興局：7月15日）

品種	地区	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	64.4	90	99	567	121	108	12.0	0.4	0.7	41.8	101	99
	中央	66.8	91	99	555	122	118	12.0	0.2	0.7	39.0	96	94
	県南	64.0	88	98	543	123	109	11.7	0.2	0.5	42.5	101	98
	全県	64.7	89	98	554	122	110	11.9	0.3	0.6	41.6	100	98
ひとめぼれ	中央	63.6	87	96	552	110	101	11.5	0.0	0.2	38.5	106	102

注) 平年比: 平年値(過去10年間(H28～R7)の平均値)と比較した割合

② 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況（あきたこまち）

本年の標植の幼穂形成期（幼穂長2mm）は、平年より5日早い7月5日だった。生育は、草丈58.9cm（平年比97%）、㎡当たり茎数693本（同121%）、葉緑素計値40.4（同97%）だった。

晩植の幼穂形成期も平年より3日早い7月11日になり、草丈56.2cm（平年比89%）、㎡当たり茎数647本（同122%）、葉緑素計値36.4（同88%）だった。

茎数が両区でかなり多く、草丈と葉色は晩植で平年を大きく下回った。

表－2 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況

試験区	幼穂形成期	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月5日	58.9	86	97	693	148	121	11.0	±0.0	±0.0	40.4	97	97
晩植	7月11日	56.2	80	89	647	115	122	11.3	+0.1	+0.2	36.4	98	88

注1) 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月25日

注2) 調査日: 標植 7月5日、晩植 7月11日

注3) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

2) 直播栽培

7月15日の定点調査（農試ほ場含む）による全県の生育概況は、草丈56.7cm（平年比97%）、 m^2 当たり茎数617本（同101%）、葉数10.2葉（平年差-0.1葉）、葉緑素計値36.9（平年比90%）であった。草丈は平年よりやや短い地点が多く、茎数は平年並だが、ほ場間差が大きかった。葉緑素計値は平年より低かった。

表-3 調査結果（湛水直播 あきたこまち、農試および農業振興普及課 7月15日調査）

設置 場所	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農試	60.5	85	98	708	142	124	10.1	-0.4	±0	36.9	94	90
大館市	52.0	91	97	696	123	109	9.6	-1.8	-0.7	34.9	80	85
井川町	54.1	82	91	468	77	75	10.0	-1.1	-0.4	34.3	82	84
美郷町	60.1	94	98	583	110	103	10.2	-0.8	-0.2	39.4	111	99
横手市	56.8	89	101	630	85	94	11.2	-0.3	+0.9	38.8	91	93
全県	56.7	88	97	617	108	101	10.2	-0.9	-0.1	36.9	91	90

注1) 平年値: 過去10年間(H28~R7)の平均値

(3) 病害虫の発生概況

1) 葉いもち

予察ほ及び防除適期決定ほにおける病斑増加状況調査（7地点、いもち病接種条件）では、7月3半旬までに5地点で発病が確認された。最初に病斑が確認された日は、三種町が7月8日、秋田市、由利本荘市、湯沢市が7月13日、北秋田市が7月14日だった。病斑の大きさ等から総合的に判断し、全県の全般発生開始期は平年よりやや遅い7月10日頃（平年7月5日）と推定された。

抽出ほ場調査（7月2半旬、80地点）では、発病株率が0.1%（前年0.7%）、発病地点率が1.3%（前年8.8%）だった。

全般発生開始期確認調査（7月3半旬、21地点）では、発病地点率が14.3%（平年14.4%）、坪状発生地点率は4.8%（平年6.1%）でいずれも平年並、散生病斑地点率が14.3%（平年8.2%）でやや多かった。1調査単位当たりの坪状か所数は0.01個（平年0.05個）でやや少なく、散生病斑数は0.12個（平年0.04個）で多かった。

2) 斑点米カメムシ類

抽出ほ場調査（7月2半旬）における畦畔のすくい取り調査では、アカスジカスミカメのすくい取り数は4.7頭（平年5.8頭）、発生地点率は28.8%（平年27.0%）でいずれも平年並だった。アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は3.9頭（平年3.4頭）、発生地点率は41.3%（平年38.9%）でいずれも平年並だった。同調査における畦畔雑草の状況別のすくい取り数では、「除草しているが、出穂しているイネ科雑草がある」や「除草していない」畦畔で斑点米カメムシ類のすくい取り数が多かった。水田内雑草調査では、ノビエの発生密度および発生地点率はいずれも高かった。カヤツリグサ科雑草の発生密度はやや高く、発生地点率は低かった。

3 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

各地域振興局による定点調査（7月15日）結果から、茎数は平年に比べて多く、草丈と葉色は平年並だった。葉数は平年より進んでいるほ場が多いことから、幼穂形成期は前進し、減数分裂期や出穂期も早まる見通しである。移植が遅く、中干しを継続しているほ場もあるが、これから幼穂が成長し、イネが水分を必要とする時期に入るため、土壤水分を切らさないよう、間断かん水に切り替える。

本年も高温が続く見通しであるため、「高温登熟」が懸念される。稲体の活力を保ち、登熟を良好にするための適正な肥培管理と水管理を行う。

また、斑点米カメムシ類の防除を徹底するほか、いもち病の発生状況を確認し、適期に防除する。

（1）水稻生育と気象変化に対応した水管理

幼穂形成期から出穂までの水管理は稲体の活力維持のため間断かん水が基本である。中干しを十分に実施できなかったほ場では、落水期間が長めの間断かん水を実施し、田面の硬度を確保する。

減数分裂期（数株からそれぞれ主茎を3本抜き取り50～60%以上の茎の葉耳間長が±0の日）は、一般的に出穂期前15～10日頃である。なお、気象感応試験の直近10年の調査では、減数分裂期～出穂期の日数は8日と短期化しており、適期を逃さず管理する。また、減数分裂期の稲は低温に最も弱い。日平均気温が20℃以下（最低気温17℃以下）では障害不稔を発生するおそれがあるので、低温時は深水管理（17～20cm）を行い幼穂を保護する。なお、用水の水温が気温より低い場合は逆効果になるので注意が必要である。

出穂の時期は稲が水を多く必要とするので、出穂から10日間は5～6cm程度湛水して水を切らさないように管理する。

その後は、間断かん水を基本とするが、気温が30℃以上になる場合は、かけ流しを行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水や午前にかん水を行うなど、水分供給と地温の低下に努める。また、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消耗を軽減する。（稲作指導指針p75、p81参照）

（2）カドミウム含有米の発生防止

カドミウム含有米の発生が懸念される地域で「あきたこまちR」以外の品種を作付している場合には、カドミウムの吸収を抑制するために、常時湛水状態を出穂前後各3週間は維持し、田面が空気に触れないようにする。（資料編p.25参照）

(3) あきたこまちの出穂期の予測（7月15日現在）

7月16日以降の気温が平年並で経過した場合や平年より2℃高く経過した場合の中苗移植のあきたこまちの出穂期は、発育モデルにより表－4のとおり予測される。近年は、実際の生育の方が予測より速く進む傾向にあるため、予測日を目安にし、ほ場観察により生育を見極め、追肥や病害虫防除等の栽培管理を適期に実施する（資料編p. 19～21参照）。

表－4 中苗移植のあきたこまちの出穂期予測（想定気温別）

各地域の移植盛期	アメダス 観測地点	7月16日以降気温「平年並」		7月16日以降気温「平年+2℃」	
		減数分裂期	出穂期	減数分裂期	出穂期
県北 5月20日	大館	7月26日頃	8月5日頃	7月25日頃	8月3日頃
県中央 5月19日	大正寺	7月25日頃	8月3日頃	7月24日頃	8月1日頃
県南 5月23日	横手	7月23日頃	8月1日頃	7月22日頃	7月30日頃

(4) 生育・栄養診断に基づいた穂肥（資料編p. 22参照）

減数分裂期の追肥の要否は、基本的に幼穂形成期に実施した栄養診断結果に基づいて判断する。

幼穂形成期の生育・栄養診断でⅠ～Ⅳ型の生育型に該当した場合は、減数分裂期に窒素成分で2kg/10a追肥する。ただし、減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合は、早めに追肥する。Ⅴ－1、Ⅴ－2型の生育型に該当する場合は、ムラ直し程度に窒素成分で1kg/10a追肥する。なお、過剰な追肥や出穂期に近い追肥は、玄米のタンパク質含有率を高め、食味の低下につながることに注意する。

本年は、草丈と葉色は平年並だが、茎数は平年より多く、過剰な生育のほ場もみられることから、幼穂形成期の栄養診断により倒伏程度が2以上に判定された場合には、やむを得ぬ緊急手段として倒伏軽減剤の使用を検討する。（稲作指導指針p. 77参照）

※高温登熟対策としての追肥（栄養診断により追肥不要と診断されたほ場を対象）

本年は8月も高温が続く見通しであり、高温登熟（白未熟粒など発生）の対策として、減数分裂期の葉色が理想生育の下限値を下回るほ場では、減数分裂期に窒素成分で1kg/10a以下の追肥を検討する。なお、基肥全量施肥（いわゆる基肥一発施肥）の場合でも、葉色が急に低下し、下限値を下回ったほ場においては、緊急措置として同様の追肥を検討する。（稲作指導指針p. 123～126参照）

＜「あきたこまち」における減数分裂期の葉緑素計値の理想値（下限）＞

県北	中央	県南
3 8	3 6	3 7

「減数分裂期」：数株からそれぞれ主茎を3本抜き取り50～60%以上の茎の葉耳間長が±0cmの日

(5) いもち病防除

1) 葉いもち

- ① 葉いもちが発生しているほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤、ブラシン剤）で防除する。

2) 穂いもち

- ① 葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤またはゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤を散布するか、出穂直前にトライフロアブルかビーム剤および穂揃期にトライフロアブルかラブサイド剤を茎葉散布する。
- ② 葉いもちが多発しているほ場では、上述の①に加え、さらに、傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。
- ③ 育苗施設内外の衛生管理や適正な育苗期いもち防除及び葉いもち防除を広域的に実施し、葉いもちの発生がない場合は、穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～7日後にトライフロアブルまたはラブサイド剤の茎葉散布を行う。
- ④ 薬剤の使用に当たっては、テブフロキン剤（トライ剤）の総使用回数は2回以内、フサライド剤（ラブサイド剤）、トリシクラゾール剤（ビーム剤）の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内であることに注意する。

（令和8年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準（以下、防除基準）p. 27～29を参照）

(6) 紋枯病防除

- 1) 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように丁寧に茎葉散布する。出穂直前の防除が効果的だが、多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。
- 2) モンガリット粒剤やリンバー粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限り。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。

（防除基準p. 30を参照）

(7) 稻こうじ病防除

- 1) 前年多発したほ場では、出穂20～10日前にドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- 2) ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- 3) Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に使用する。

（防除基準p. 31を参照）

(8) ごま葉枯病防除

砂質かつ、秋落ちが認められるCECが低い水田（15meq/100g未満）において、幼穂形成期～穂ばらみ期に本病の発病がみられる場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシンフロアブルで防除する。

薬剤の使用に当たっては、フサライド剤（ブラシン剤）、トリシクラゾール剤（ノンブラス剤）の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内であることに注意する。

（防除基準p. 29を参照）

(9) 斑点米カメムシ類防除

1) 雑草管理

- ① 畦畔・農道、休耕田・法面等の草刈りはイネの出穂10日前までに地域一斉に行う。
- ② 出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布当日から散布7日後までに畦畔・農道の草刈りを実施し、増殖源となるイネ科雑草を除去する。

2) 薬剤散布

- ① イネの出穂期を確認し、出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布を行う。薬剤は畦畔を含めたほ場全体に散布する。
- ② 出穂したホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場や斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接したほ場、発生予察情報に基づいて多発が予想される場合は、出穂期10日後頃の散布に加えて、同24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤による茎葉散布を行う。

(10) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- 1) 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- 2) 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- 3) 健康管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- 4) 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- 5) 防除履歴は必ず記録する。

(11) 農作業中の熱中症及びクマ対策の徹底

- 1) 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しの良い場所で作業する。
- 2) 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- 3) 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- 4) 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- 5) 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。
- 6) 農作業中を含め、クマ対策を徹底する。
 - ・「クマダス(<https://kumadas.net/>)」でクマの出没を確認し、遭遇を避ける。
 - ・作業中はクマ避けの鈴など音のでるものを常に携帯する。

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
7 月下旬 ～ 8 月中旬	水管理 (気象変化に対応した水管理)	○幼穂形成期から出穂までは間断かん水とする。出穂から10日間は湛水状態で管理し、その後は再び間断かん水とする。 ○減数分裂期～穂ばらみ期は、低温に特に弱いため、低温時（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）には深水管理（17～20cm）を徹底する。 ○出穂後に気温が30℃以上になる日は、かけ流しかん水を行う。用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水やかん水を午前に行うなど、水分供給と地温の低下に努める。
	生育・栄養診断の実施	○減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合、早めに追肥する。 ○過剰な追肥や出穂期に近い追肥は、食味低下を招くため行わない。 ○高温登熟対策のため、減数分裂期に葉色が理想生育の下限以下の場合は窒素で1kg/10a以下の追肥を検討する。
	いもち病の防除 (葉いもち・穂いもち)	○葉いもちが発生しているほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤、ブラシン剤）で防除し、上位葉の発病を抑制する。 ○ほ場の検診を行い、葉いもちの発病状況に応じて穂いもち防除を行う。
	紋枯病の防除	○穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。 ○粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限定し、薬剤に応じて出穂20～10日前、又は出穂15～5日前に防除する。
	稻こうじ病の防除	○前年多発したほ場では、出穂20～10日前にドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
	ごま葉枯病の防除	○砂質かつ、秋落ちが認められるCECが低い水田（15meq/100g未満）において、幼穂形成期～穂ばらみ期に本病の発病がみられる場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシフロアブルで防除する。
	斑点米カメムシ類の防除	○イネの出穂10日前までに農道・畦畔の草刈りを行う。 ○出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを行い、増殖源の除去に努める。 ○出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。 ○出穂したホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場や斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接したほ場、発生予察情報に基づいて多発が予想される場合は、1回目の防除に加えて、出穂期24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤による茎葉散布を行う。
	農薬飛散防止と安全使用	○農薬散布時は、特に周辺作物への飛散防止対策を徹底する。 ○散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。 ○健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。 ○農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実に行う。 ○防除履歴を必ず記録する。

大豆

生育に応じた栽培管理の徹底

- － ほ場観察による病虫害防除の徹底 －
- － 雑草対策と排水対策の実施 －

1 「リュウホウ」の生育概況（農業試験場 作況調査試験）

6月3日播種の7月10日現在の生育は、草丈35.7cm（平年比86%）、主茎節数7.1節（平年差－0.2節）、分枝数0.2本（同＋0.1本）であった。

6月18日播種の7月10日現在の生育は、草丈20.8cm（平年比85%）、主茎節数4.0節（平年差＋0.1節）であった。

表－1 農業試験場におけるリュウホウの生育概況

調査日	播種日	草丈(cm)			主茎節数(節)			分枝数(本)		
		本年	前年比(%)	平年比(%)	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
7/10	6/3	35.7	67	86	7.1	－1.7	－0.2	0.2	－0.4	＋0.1
	6/18	20.8	77	85	4.0	±0	＋0.1	0	±0	±0

注1) 平年値は6月3日播種、6月18日播種ともにH28～R7年のうち最大値と最小値を除いた8か年の平均値

注2) 生育データはデントコーン-小麦-大豆の輪作畑における慣行栽培による

2 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

（1）最終培土

培土は、倒伏軽減や雑草防除の観点からも重要な作業であるが、最終培土の時期が遅れると畦間の耕起・かく拌に伴う断根や、管理作業機の接触に伴う茎葉損傷により生育への悪影響のおそれがあるため、培土は開花の10日前には終了する（令和6年大豆指導指針p. 48参照）。

秋田農試の作況調査における「リュウホウ」の平年の開花期は、6月3日播種が7月26日、6月18日播種が8月5日である。

（2）排水対策の徹底

降雨による停滞水が速やかに排水されるよう、明きよの点検や補修を随時行う（令和8年6月30日発行の作況ニュース第4号参照）。

（3）病虫害防除

今後の気象に注意し、ほ場の観察による病虫害の早期発見、防除に努める（防除基準p. 52～58参照）。

- 1) 近年、カメムシ類による子実被害が増加傾向にあるため、ほ場を観察し、発生状況に応じて防除する。秋田市予察ほにおけるホソヘリカメムシのフェロモントラップへの7月1～3半旬の総誘殺数は2頭（平年9.5頭）で少なかった。今後、誘殺数が増加する可能性があるため、発生状況に注意する。

- 2) 食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類、ウワバ類等）、飛来性害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ等）やアブラムシ類は、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じて防除する。
- 3) ウコンノメイガは、7月6半旬には場全体で40～60茎の葉巻数を調査し、茎当たりの葉巻数が1.3個以上確認された場合は、8月上旬までに防除する。
- 4) 排水対策を徹底して黒根腐病や茎疫病の発生を防ぐ。また、罹病株は早期に抜き取り処分し、病害の拡大を抑制する。
- 5) 紫斑病は開花期20～30日後に防除する。また、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

(4) 雑草対策

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合は、手取りまたは大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行う。大豆生育期処理除草剤は、薬剤によって使用時期等が異なるため使用基準を遵守し、適期に防除する（防除基準p. 351～358参照）。

1) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草

ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルのいずれかを使用する。

2) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草

大豆バサグラン液剤の効果が高い。ただし、適用品種はリュウホウに限る。

なお、大豆バサグラン液剤は、高温時や日射が強い場合、湿害等による生育不良のほ場で薬害が助長されることがあるため、散布日の天候や生育を考慮して散布する。

3) アレチウリ、アメリカアサガオ、マルバルコウ等のつる性の帰化雑草やシロザ等の広葉雑草

アタックショット乳剤の効果が高い。ただし、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後に連続した降雨が予想される場合、処理後3日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合は強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。また、大豆6葉期（ただし開花前）までに使用する。

4) 取りこぼしのあった雑草や大型化する雑草、防除の難しい雑草（シロザ・エノキグサ・ツユクサ・イヌホオズキ・帰化アサガオ類・アレチウリ等）

バスタ液剤による畦間・株間処理または大豆バサグラン液剤、ザクサ液剤、ラウンドアップマックスロードによる畦間処理を行う。また、帰化アサガオ類やアレチウリに対してはバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する。なお、バスタ液剤とザクサ液剤の成分は同一成分として総使用回数に数えるので注意する。

畦間・株間処理や畦間処理にあたっては、薬液付着に伴う薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーや専用ノズルを必ず使用する。

(5) 開花期追肥

水田転換初年目畑や地力の高いほ場では必要ないが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場（土壌や根粒からの窒素供給力の低下が著しいほ場）や湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥効果が認められている。

追肥は、開花期（開花期～開花後10日頃）に硫安または尿素を用い、窒素成分で10a当たり5～10kg施用する。（令和6年大豆指導指針p. 24～27、66～69参照）。

(6) 開花期以降の土壌水分の保持

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、1)、2)の対策により、大豆の好適な地下水位(40cm程度)の保持に努める。

なお、著しい高温少雨に遭遇した場合の対策については、3)、4)にある畝間かん水や明きょへのかん水等の対策があるが、十分な用水量が確保でき、速やかな排水が行えるほ場など実施可能な条件に限られるため、ほ場条件を確認した上で実施を検討する。

1) 梅雨明け後の暗きょの操作

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて土壌中の水分の保持に努める。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図る。

2) 地下かんがいシステムが備わっているほ場について

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壌に貯留するように努める。

地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える場合等を目安に実施する。この時の地下水位は、20～30cm程度に設定し、1日給水した後、暗きょ栓を開放して排水する。

3) 畝間かん水の目安と留意点

畝間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える場合等を目安に実施する。

30a以上のほ場では、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畝の崩壊と水口付近の湿害を防ぐ。ほ場(区画)全体に水が行き渡ったら水口をしっかりと止め、速やかに排水する。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。

ただし、水回りが悪いほ場や、速やかな排水を行えないほ場では、湿害等が発生することがあるため実施しない。

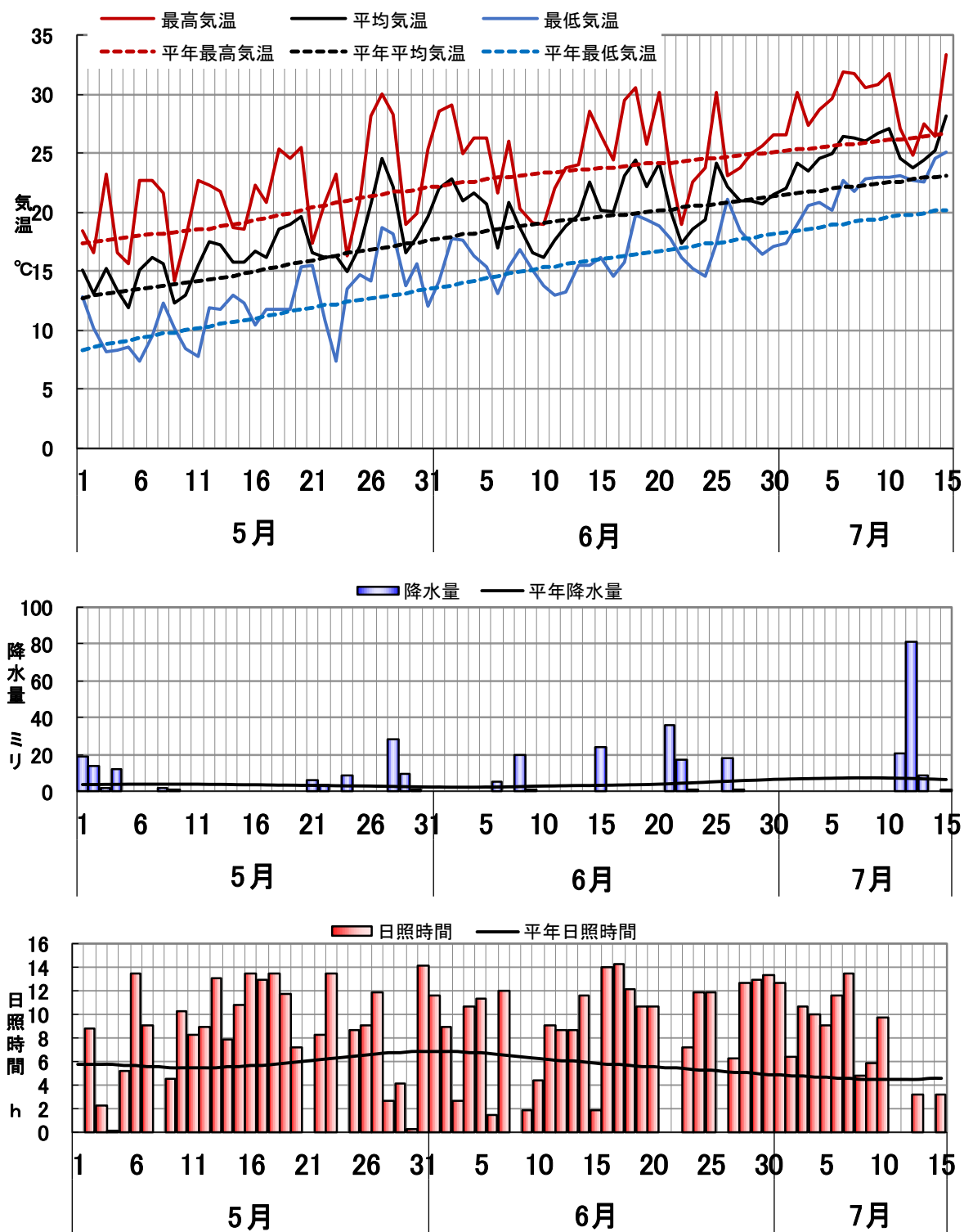
4) 明きょへのかん水の目安と留意点

排水口を閉じ、明きょ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和8年5月1日から7月15日の気象経過図（観測地点：秋田地方気象台）

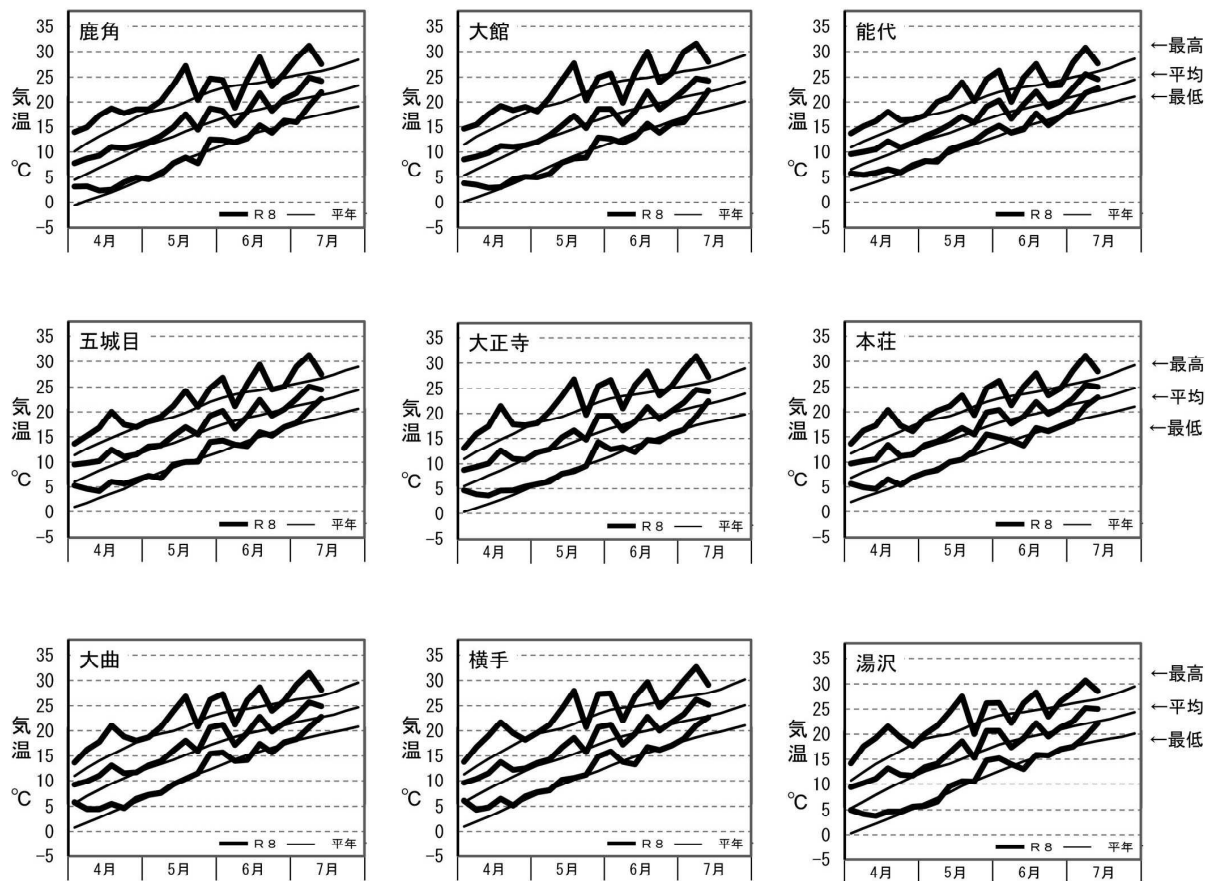


(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

項目 \ 時期	7月上旬	
	本年	平年比較
平均気温(℃)	25.2	+3.1℃
降水量(mm)	0.0	0%
日照時間(hr)	94.1	201%

(3) 各地域の気象(各アメダス観測地点別半旬平均気温、7月3半旬まで)



2 定点調査結果（各地域振興局調査 7月15日）

表－1 定点調査結果（品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	61.4	84	97	601	125	104	12.0	0.3	0.8	42.9	99	100
北秋田	9	65.6	93	100	596	122	113	11.9	0.2	0.5	41.6	104	100
山本	9	64.9	91	98	518	116	105	12.2	0.8	0.9	41.2	100	98
秋田	10	68.3	93	100	543	120	116	12.2	0.3	0.7	38.3	95	92
由利	2	59.5	83	96	615	129	127	11.3	-0.1	0.5	42.4	104	102
仙北	10	62.9	85	96	548	120	110	11.8	0.3	0.7	41.0	99	97
平鹿	11	64.4	90	98	529	124	106	11.6	0.0	0.5	43.8	103	100
雄勝	8	64.9	89	98	555	123	113	11.7	0.2	0.4	42.5	102	97
全県平均	64	64.7	89	98	554	122	110	11.9	0.3	0.6	41.6	100	98
7月15日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	60	57	62	552	519	586	10.8	10.6	11.0	40	39	42
	中央	61	58	63	515	471	559	10.7	10.5	10.9	42	40	44
	県南	62	60	64	463	443	484	10.9	10.7	11.0	42	41	43

注) 平年比: 平年値(過去10年間(H28～R7)の平均値)と比較した割合

表－2 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	58.5	82	92	563	113	101	11.1	-0.5	-0.1	38.1	98	97
由利	6	65.3	89	97	549	109	101	11.7	0.3	0.4	38.6	109	103
中央地区平均	8	63.6	87	96	552	110	101	11.5	0.0	0.2	38.5	106	102

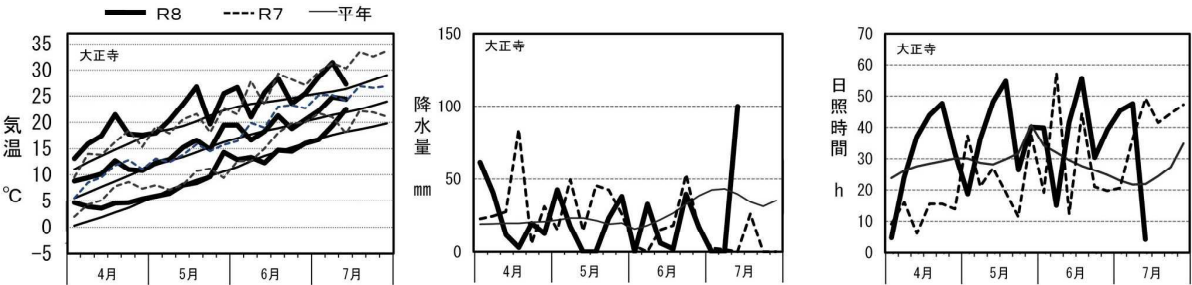
注) 平年比: 平年値(過去10年間(H28～R7)の平均値)と比較した割合

3 関連成績

(1) 気象感応試験

1) 稲作期間の気象（～7月15日まで）

6月6半旬以降、日平均気温は平年を上回って経過し、特に最高気温が7月2半旬まで高かった。また7月2、3半旬は最低気温が高く経過した。降水量は6月5半旬以降、ほとんど無かったものの、7月3半旬に大雨があった。日照時間は6月5半旬以降かなり多く経過し、7月3半旬は日照時間はかなり少なかった。



図－1 令和8年の稲作期間中の気象経過(大正寺アメダス観測地点、半旬別、7月15日現在)

2) 幼穂形成期（幼穂長2mm期）の生育概況（あきたこまち）

標植区の幼穂形成期は、平年より5日早い7月5日となり、平成12年に同ほ場で試験を開始して以来、最も早かった。また晩植の幼穂形成期は、前年と同じ7月11日で、平年より3日早かった。

草丈は標植では平年並だが、晩植では平年よりかなり短かった。茎数は両区でかなり多く、多けつ型の草姿だった。葉色は標植では平年並だったが、晩植では平年よりかなり淡かった。晩植では、前回調査（7月5日）時より茎数が8%減少し、草丈と葉色の平年比も低くなっており、生育の鈍化が伺われた。

理想生育量と比べ、標植の草丈と葉緑素計値は下限に近いが、茎数がかなり多いため、生育量（指数）は上限を上回った。晩植は標植同様に茎数はかなり多いが、草丈と葉緑素計値が理想生育を下回っており、生育量は理想生育範囲内だった。

標植の生育型はV-2に該当し、生育過剰と診断された。また晩植はIV型になり、栄養診断値は目標生育の範囲内だった。

表-3 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況と生育診断

試験区	幼穂形成期	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月5日	58.9	86	97	693	148	121	11.0	±0.0	±0.0	40.4	97	97
晩植	7月11日	56.2	80	89	647	115	122	11.3	+0.1	+0.2	36.4	98	88
理想生育量*		58~63(cm)			471~559(本/㎡)			10.5~10.9(葉)			40~44(SPAD値)		

注1) * あきたこまちにおける幼穂形成期頃の理想生育量(中央地域)

注2) 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月25日

	生育量($\times 10^3$)	栄養診断値($\times 10^5$)	生育型(診断結果)
標植	40.8	16.5	V-2型(生育過剰)
晩植	36.4	13.2	IV型(籾数やや多い)
理想生育量	32.2~37.0	11.9~14.2	

3) 出葉状況

標植は、11葉以降で平年より5日早く出葉した。晩植は平年より2～3日早い出葉が続いた。

表－4 出葉期の平年比較（7月15日現在、気象感応試験）

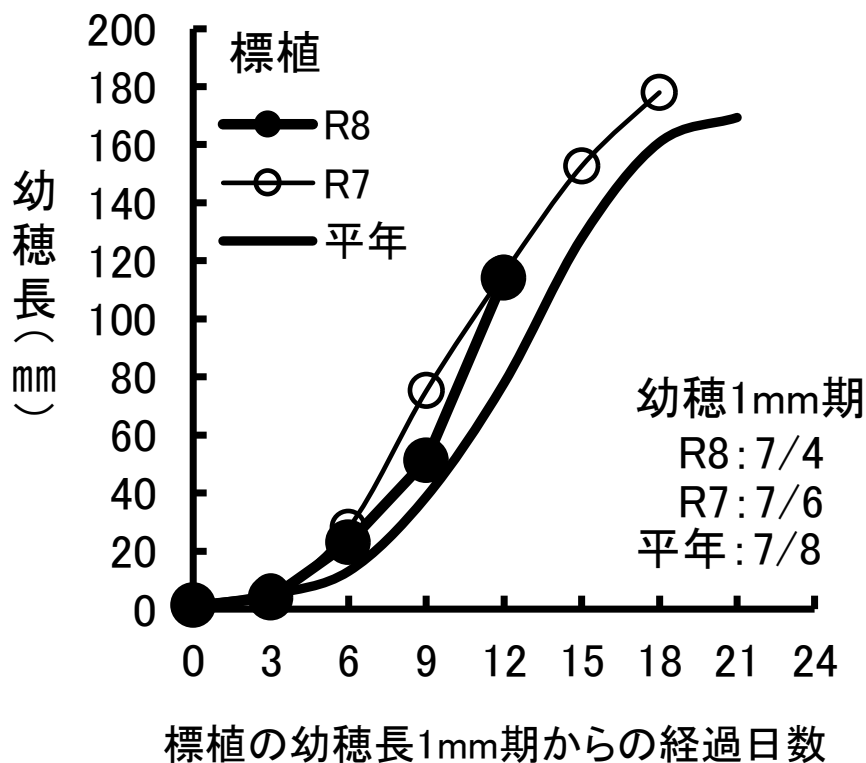
試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植基準)	R8	5/21	5/27	6/2	6/7	6/13	6/18	6/26	7/6	7/12
	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30	7/7	7/15
	平年	5/24	5/29	6/5	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/17
	平年差	-3	-2	-3	-4	-3	-4	-5	-5	-5
晩植 (5月25日移植基準)	R8	5/29	6/2	6/8	6/14	6/18	6/24	7/2	7/10	
	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3	7/11	7/18
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21
	平年差	-2	-4	-3	-2	-3	-3	-2	-3	

注1) 標植の平年値は、H12～R7までの平均。晩植の平年値は、H29～R7までの平均。

注2) 移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.6葉。本年は標植は3.4葉、晩植は3.8葉。

4) 幼穂長の伸長状況

標植の幼穂長1mm期は、平年より4日早い7月4日で、1mm期から9日目までは平年よりやや長く経過し、12日目ではさらに幼穂の伸長が進み、平均114mmで平年（78mm）との差が拡大した。



図－2 幼穂長の平年比較（7/16現在）

平年はH12～R7の平均

(2) 直播作況試験

1) 生育概況

7月15日の調査結果では、草丈60.5cm（平年比98%）、 m^2 当たり茎数708本（同124%）、葉数10.1葉（平年差±0葉）、葉緑素計値36.9（平年比90%）であった。幼穂形成期は平年（7月19日）より4日早い7月15日であった。

表－5 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種）

調査日	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
7月15日	60.5	85	98	708	142	124	10.1	-0.4	±0	36.9	94	90

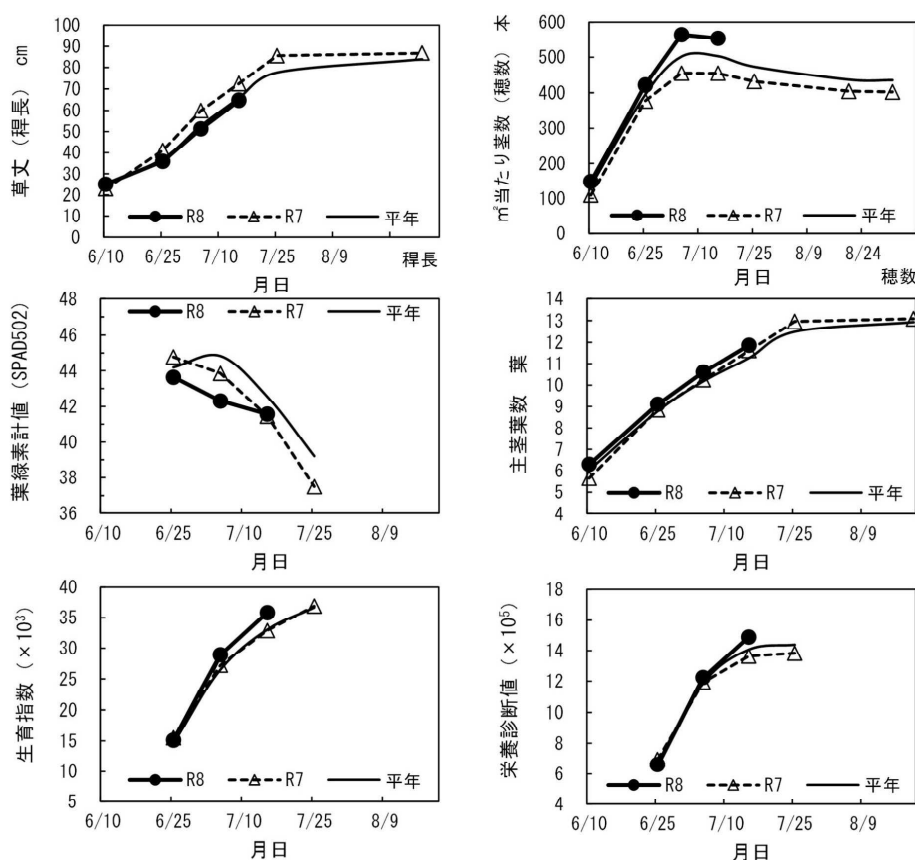
注1) 平年値: 過去10年間(H28～R7)の平均値 注2) 中干し期間: 6月29日～7月10日

4 今後の生育の見通しと栽培管理

(1) 本年の水稻生育の特徴（各地域振興局定点調査結果）

全県平均の草丈は、平年並に推移している。一方、茎数は多く、ほ場間差が大きい。葉緑素計値は7月上旬は平年を下回ったが、7月15日調査では平年並だった。葉数は平年よりやや多く経過しており、今後の生育ステージは、高温の気象予報も考慮すると、早く進むと推定される。

生育指数は茎数が多いことから、平年を上回っている。また、葉色はやや淡いものの、栄養診断値も平年をやや上回っている。今後はほ場毎の稲の生育型を把握し、高温の気象予報も念頭にいれ、水管理と肥培管理を適切に実施する。



図－3 各地域振興局定点調査（7月15日）結果（あきたこまち、全県平均）

注1) 生育指数＝草丈(cm)×茎数(本/ m^2)

注2) 栄養診断値＝草丈(cm)×茎数(本/ m^2)×葉緑素計値

(2) 減数分裂期の予測（あきたこまち）

「あきたこまち」の苗種別、移植期別の減数分裂期および出穂期への到達時期予測を示した。これは、各アメダス観測地点の7月15日までの平均気温と7月16日以降の平年気温を用いた発育モデルによるものである。

地点、移植日、苗の種類から、該当する到達時期を参照し、ほ場における各生育ステージの目安とするが、近年、実際の生育ステージは、予測より早くなる傾向にあるため、ほ場観察で生育を見極め、適期の管理に努める。

※最新の生育予測は下記URLをご確認ください。

(<https://rice-forecast.s3.ap-northeast-1.amazonaws.com/index.html>)



こちらのQRからも
「あきたこまち生育予測システム」を御利用頂けます。

このシステムは、「農業DXを牽引する公設試デジタル推進事業」により作成されました。

表－6 発育モデルによるあきたこまちの減数分裂期の予測

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月16日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月22日	7月22日
	15日	7月26日	7月28日	7月29日	7月23日	7月24日	7月25日
	20日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月29日
	25日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月30日	8月1日
大館	10日	7月23日	7月24日	7月25日	7月20日	7月21日	7月22日
	15日	7月26日	7月27日	7月28日	7月23日	7月23日	7月24日
	20日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月28日
	25日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月29日	7月30日
鷹巣	10日	7月22日	7月22日	7月23日	7月18日	7月19日	7月19日
	15日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月22日	7月22日
	20日	7月27日	7月28日	7月30日	7月24日	7月25日	7月26日
	25日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月29日
能代	10日	7月21日	7月22日	7月22日	7月18日	7月18日	7月19日
	15日	7月24日	7月25日	7月26日	7月20日	7月21日	7月22日
	20日	7月27日	7月28日	7月29日	7月23日	7月24日	7月25日
	25日	7月29日	7月31日	8月1日	7月25日	7月27日	7月28日
大潟	10日	7月22日	7月23日	7月24日	7月19日	7月20日	7月20日
	15日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月22日	7月23日
	20日	7月28日	7月29日	7月30日	7月24日	7月25日	7月26日
	25日	7月30日	8月1日	8月2日	7月26日	7月28日	7月29日
秋田	10日	7月18日	7月19日	7月19日	7月15日	7月15日	7月15日
	15日	7月21日	7月22日	7月22日	7月17日	7月18日	7月18日
	20日	7月24日	7月25日	7月26日	7月20日	7月21日	7月22日
	25日	7月27日	7月28日	7月29日	7月23日	7月24日	7月25日
大正寺	10日	7月23日	7月23日	7月24日	7月20日	7月20日	7月21日
	15日	7月25日	7月26日	7月27日	7月22日	7月23日	7月24日
	20日	7月28日	7月29日	7月31日	7月25日	7月26日	7月27日
	25日	7月30日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月30日
本荘	10日	7月21日	7月21日	7月22日	7月17日	7月18日	7月18日
	15日	7月23日	7月24日	7月25日	7月20日	7月20日	7月21日
	20日	7月26日	7月27日	7月28日	7月22日	7月23日	7月24日
	25日	7月29日	7月30日	7月31日	7月25日	7月26日	7月27日
大曲	15日	7月22日	7月22日	7月23日	7月18日	7月18日	7月19日
	20日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月22日	7月23日
	25日	7月28日	7月29日	7月30日	7月23日	7月24日	7月26日
	30日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月28日	7月30日
角館	15日	7月22日	7月23日	7月24日	7月19日	7月19日	7月20日
	20日	7月26日	7月27日	7月28日	7月22日	7月23日	7月24日
	25日	7月28日	7月29日	7月31日	7月24日	7月25日	7月26日
	30日	8月1日	8月2日	8月4日	7月28日	7月29日	7月31日
横手	15日	7月21日	7月22日	7月23日	7月18日	7月18日	7月18日
	20日	7月25日	7月25日	7月26日	7月21日	7月21日	7月22日
	25日	7月27日	7月28日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
	30日	7月31日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月29日
湯沢	15日	7月23日	7月23日	7月24日	7月19日	7月19日	7月20日
	20日	7月26日	7月27日	7月28日	7月22日	7月23日	7月24日
	25日	7月28日	7月30日	7月31日	7月24日	7月25日	7月27日
	30日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日

注）日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(3) 出穂期の予測（あきたこまち）

表－7 発育モデルによるあきたこまちの出穂期の予測

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月16日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	8月2日	8月4日	8月7日	7月30日	7月31日	8月3日
	15日	8月5日	8月7日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
	20日	8月8日	8月11日	8月14日	8月4日	8月6日	8月9日
	25日	8月10日	8月13日	8月17日	8月6日	8月8日	8月12日
大館	10日	8月1日	8月3日	8月5日	7月29日	7月30日	8月1日
	15日	8月4日	8月6日	8月8日	7月31日	8月2日	8月4日
	20日	8月7日	8月9日	8月12日	8月3日	8月5日	8月7日
	25日	8月9日	8月12日	8月15日	8月5日	8月7日	8月10日
鷹巣	10日	7月31日	8月2日	8月3日	7月27日	7月28日	7月30日
	15日	8月3日	8月4日	8月7日	7月29日	7月31日	8月2日
	20日	8月5日	8月8日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
	25日	8月8日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
能代	10日	7月30日	8月1日	8月3日	7月26日	7月28日	7月29日
	15日	8月2日	8月4日	8月6日	7月29日	7月30日	8月1日
	20日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
	25日	8月7日	8月10日	8月12日	8月3日	8月5日	8月7日
大潟	10日	8月1日	8月2日	8月4日	7月28日	7月29日	7月31日
	15日	8月3日	8月5日	8月7日	7月30日	7月31日	8月2日
	20日	8月6日	8月8日	8月10日	8月1日	8月3日	8月6日
	25日	8月8日	8月11日	8月13日	8月4日	8月6日	8月8日
秋田	10日	7月27日	7月29日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
	15日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月28日
	20日	8月2日	8月4日	8月6日	7月28日	7月30日	7月31日
	25日	8月5日	8月6日	8月9日	7月31日	8月1日	8月3日
大正寺	10日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月30日	7月31日
	15日	8月3日	8月5日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	20日	8月6日	8月8日	8月11日	8月2日	8月4日	8月6日
	25日	8月9日	8月11日	8月14日	8月4日	8月6日	8月9日
本荘	10日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月28日
	15日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日
	20日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	25日	8月6日	8月8日	8月11日	8月2日	8月3日	8月6日
大曲	15日	7月31日	8月1日	8月3日	7月26日	7月28日	7月29日
	20日	8月3日	8月5日	8月7日	7月29日	7月31日	8月2日
	25日	8月5日	8月8日	8月10日	8月1日	8月2日	8月5日
	30日	8月9日	8月11日	8月14日	8月4日	8月6日	8月9日
角館	15日	8月1日	8月2日	8月4日	7月27日	7月29日	7月30日
	20日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	25日	8月6日	8月8日	8月11日	8月1日	8月3日	8月5日
	30日	8月10日	8月12日	8月15日	8月5日	8月7日	8月10日
横手	15日	7月30日	8月1日	8月2日	7月26日	7月27日	7月28日
	20日	8月2日	8月4日	8月6日	7月29日	7月30日	8月1日
	25日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
	30日	8月8日	8月11日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
湯沢	15日	8月1日	8月2日	8月4日	7月27日	7月29日	7月30日
	20日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	25日	8月6日	8月9日	8月11日	8月2日	8月3日	8月6日
	30日	8月10日	8月13日	8月16日	8月5日	8月7日	8月10日

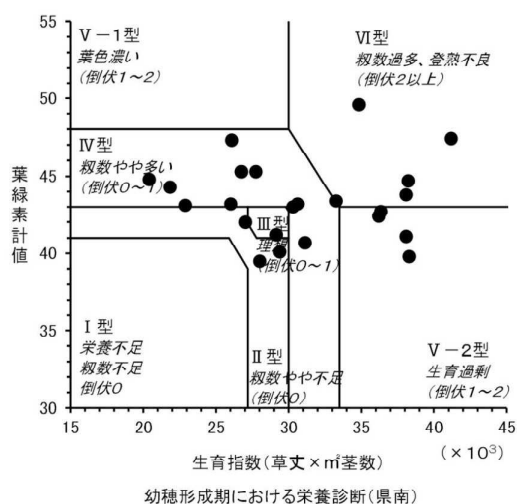
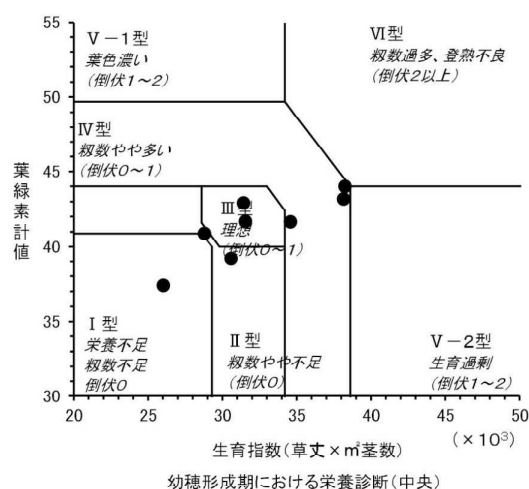
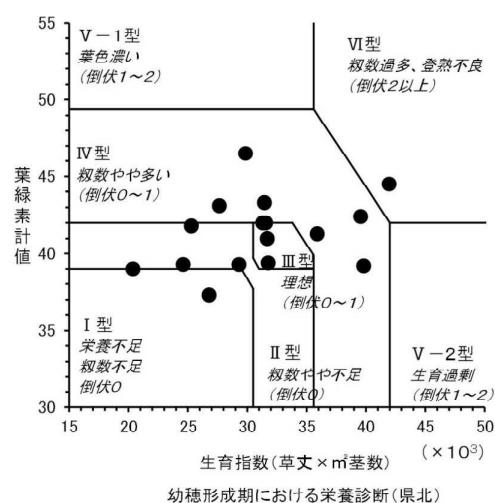
注) 日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(4) 水稻定点ほ場のあきたこまちの幼穂形成期における生育・栄養診断

1) 幼穂形成期頃における栄養診断

7月6日または7月15日調査結果から、葉数10.5～11.4を便宜上幼穂形成期相当として、図-4の通り栄養診断を行ったところ、概ねⅡ～Ⅳ型が多かった。茎数は多いものの、草丈と葉色が平年並～やや下回るほ場が多く、栄養診断値は平年をやや上回る生育量だった。なお、県南ではⅤ-2型やⅥ型の地点もあることから、生育過剰気味であり、今後は倒伏に注意しなければならない。

生育は平年より早く進んでおり、追肥体系ほ場では、葉色の低下を見極めながら、遅れないよう追肥を行う。肥効調節型肥料入りの基肥全量施肥の場合でも、生育量と葉色の推移を見極め、高温登熟対応も考慮しながら必要に応じて追肥を検討する。



生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I 型	2kg	2kg
II 型	2kg	2kg
III 型	ムラ直し1kg	2kg
IV 型	なし	2kg
V-1 型	なし	ムラ直し1kg
V-2 型	なし	ムラ直し1kg
VI 型	なし	なし

(注)目標収量 570kg/10a、あきたこまち

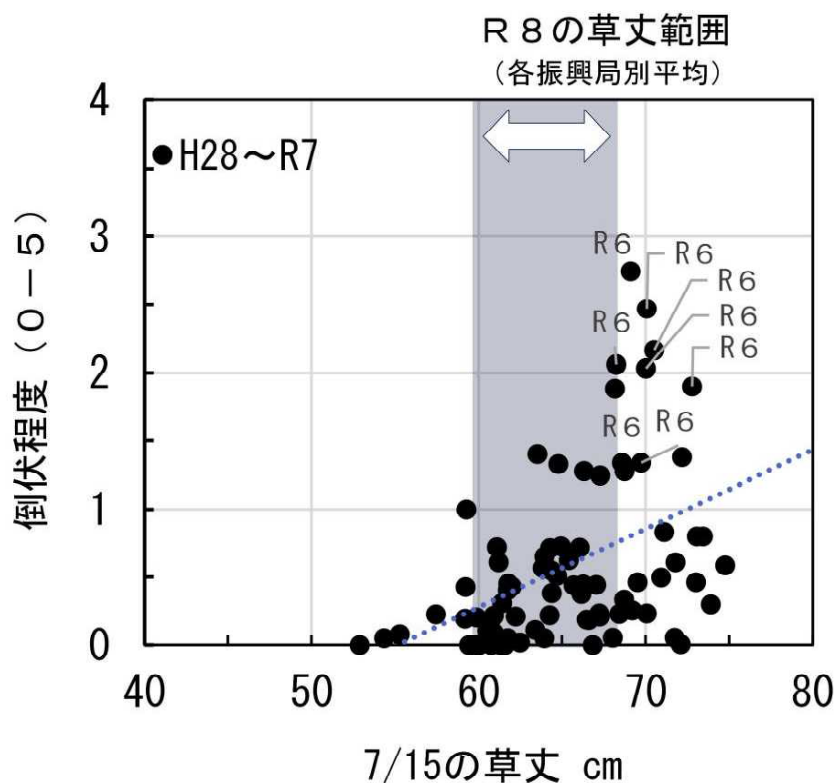
図-4 幼穂形成期頃(葉数10.5～11.4葉)の栄養診断(稲作指導指針p.75～78)

注) ●プロットは水稻定点調査(7月6日または7月15日)の結果から地域別に図示

2) 草丈と倒伏程度の関係

7月15日調査の草丈とその年次の倒伏程度の関係を各振興局別平均で見ると、本年の草丈の範囲では、倒伏程度2以上になる確率は低いと推定される（図－5）。なお令和6年はⅢ節間長の伸長が要因で、倒伏程度が大きかった。

倒伏の要因は、草丈のみではなく、出穂前の気温や日照時間、茎数の多少も影響することから、水管理や追肥量の調整により、適切な管理を行う。



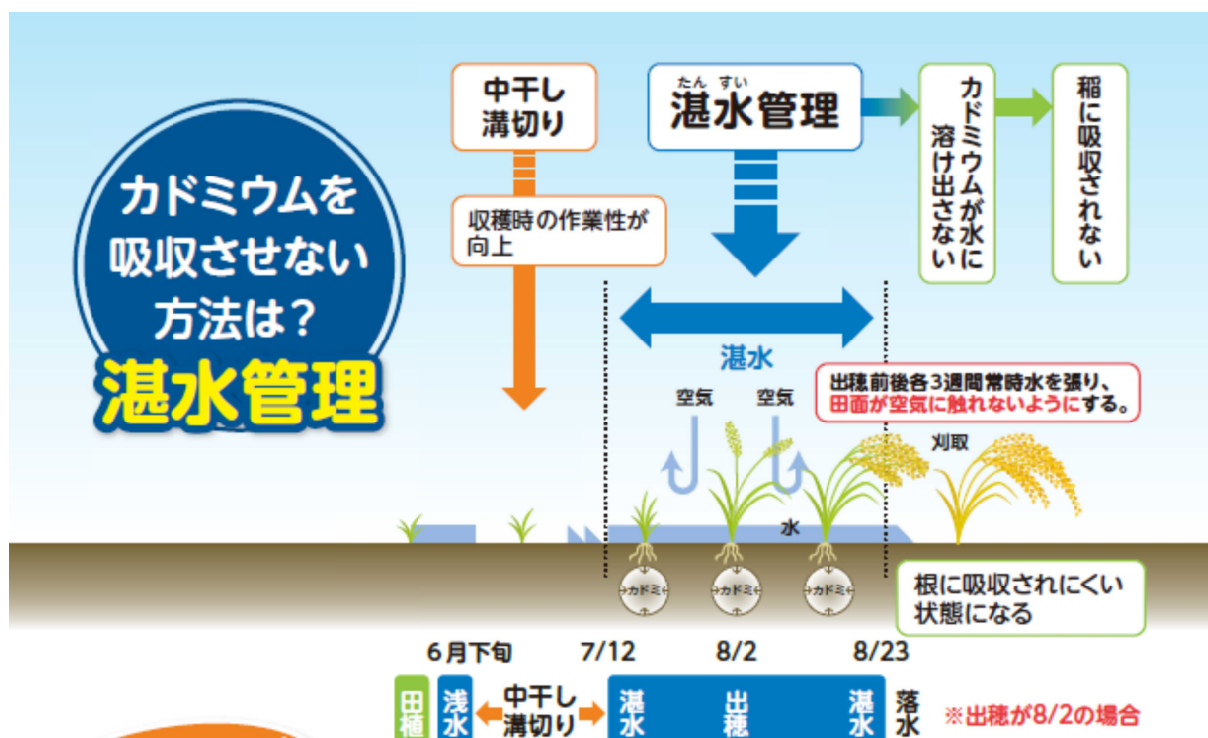
図－5 7月15日時点の草丈と倒伏程度の関係（年次別、各振興局別集計）

(5) 減数分裂期（葉耳間長±0 cm頃）の窒素追肥

減数分裂期の目安は、止葉（ n ）とその前葉（ $n-1$ ）の葉耳が重なる時期である。この時期は、出穂12～10日前頃に相当し、穂肥の適期である。幼穂形成期の栄養診断に基づき窒素追肥の判定を行う。なお、近年は減数分裂期と出穂期の間隔は8日間と短くなっており、適期を逸しないよう生育を見極める。

表－8 減数分裂期の地域別理想生育(稲作指導指針p. 78～79)

理想生育量（あきたこまち、目標収量570kg/10a）		地域	県北 7/25	中央 7/25	県南 7/25
項目					
草丈 (cm)	上限		74	72	75
	理想		72	70	74
	下限		69	69	72
茎数 (本/㎡)	上限		529	527	454
	理想		504	491	437
	下限		479	456	420
葉数 (葉)	上限		12.2	12.2	12.5
	理想		12.0	11.9	12.3
	下限		11.8	11.7	12.1
葉緑素計値	上限		40	39	39
	理想		39	38	38
	下限		38	36	37
生育量 ($\times 10^3$)	上限		38.4	37.0	33.5
	理想		36.2	34.4	32.3
	下限		33.9	32.2	30.8
栄養診断値 ($\times 10^5$)	上限		15.0	14.2	13.0
	理想		14.0	13.1	12.3
	下限		13.0	11.9	11.7



「あきたこまちR」
以外の品種

湛水管理のポイント

- 6月下旬から「中干し」を開始！ その際、強い中干しは避ける！
- ぬかりやすく、水はけが悪い水田では、中干しの際に「溝切り」を実施する！
- 「出穂前後各3週間」は常時水を張り、田面を空気に触れさせない！ 完全落水は遅めにする！

※「あきたこまちR」は湛水管理が不要のため、通常の水管理を行います。

～ 汚染米が発生すると ～

基準値を超えた米は、**湛水管理の実施を条件**として、県が買入・処分を行います。
ただし、同一生産者において、汚染米が連続発生した場合、**県の買入価格が減額**となります。

- ◎ 2年連続発生 …… 通常買入価格の1／2の価格
- ◎ 3年以上連続発生 …… 通常買入価格の1／3の価格

(例) 通常買入価格が、6,000円/30kgの場合
2年連続発生 …… 3,000円/30kg
3年連続発生 …… 2,000円/30kg

(お問い合わせ先) 秋田県農林水産部水田総合利用課・地域振興局農林部・市町村・JAへ

リサイクルマーク④
このマークは、国産米に貼付し、リサイクルマークを貼付する。

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXをお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

〇SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・秋田県内の水稻の生育状況
- ・水稻および大豆の技術情報
- ・異常気象対策
- ・その他、秋田米に関する情報



こちらのQRから
登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部

生産環境部

秋田県病虫害防除所

秋田地方気象台

東北農政局秋田県拠点

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-881-3330

内線(422・423・424)

内線(306・310)

TEL 018-881-3660

TEL 018-864-3955

TEL 018-895-7303

TEL 018-860-1786

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は8月26日（水）の予定です】